

## 被爆証言

開催 日本基督教団 広島教会 2018年3月15日

語り部 山崎敦子

この被爆証言は広島教会で開催された「教団2018年宣教師会議」において、広島教会の教会員の山崎敦子さんが、宣教師の方々に向けてお話された内容を、そのまま掲載しております。



皆様

ようこそ広島へおこしくございました。

今日は、私山崎敦子が七十三年前の「あの日」を思い起こし、見た事、あった事、体験した事を、二、三お話させていただくことになりました。

よろしくお願い致します。

—— 冊子の裏の地図を参考にしてください。

一九四五年、「八月六日」あの日は朝から暑い日でした。私は十一歳二ヶ月、小学校五年生した。

家は爆心地から2.5kmの南東にありました。

その日は、夏休み中でしたが、「月曜日」なので、学校に行く日でした。

朝食をとるため、食卓についていました。

突然西の裏口から、「ピカーッ」とするどい青白い閃光が入ってきたかと思ったとたん、「ドーン」と大音響がして、家がぐらぐらと揺れました。そして、朝なのに急に夜になったのかと思うほど、真っ暗になりました。

「みんな大丈夫？」と台所から緊張した母の声！

姉二人と私は、「大丈夫よ！」と返事しました。

そのうちす明るくなり、家中を見廻すと、建具はふっとび、家具にはガラスがいっぱい刺さり、食卓もとばされていました。

さっきまで私の側に居た犬がいません。どこにいったのかとキョロキョロしていると、二階で「キャンキャン」と鳴いています。

階段の所に行き、上がろうとすると、階段は、すっぱり抜け落ちています。上を見上げる

と、屋根に大きな穴があき、空が見えていました。

何故こうなったのか、理解できず、ぼう然としていました。

どのくらい時間がたったのか、表の方が騒々しくなりました。表通りへ出てみると、市の中心部（北の方）からすごい形相の人々が、絶え間なく歩いて来ました。

頭の毛は鳥の巣のようにもじゃもじゃになり、衣類は焼け焦げてぼろぼろになり、ヒモのようになって身体にすこしついているだけ——上半身もオシリもまる見えで、裸同然——男女の見分けも分からないくらいひどいものでした。

頭をケガされたのか、顔に血糊が、べったりつき、その上にほこりがかかり、どす黒くなった顔の人々……

両手は、多くの人が前に突き出し、腕からは、衣類の切れ端のようなものが、ぶらぶら垂れ下がっています。

「痛い!!」「水、水」と口々に云っています。

後で聞いたことですが、この状態は、熱線で腕を焼かれた皮膚が、ずるりとむけて、垂れ下がっていたものでした。

そんな中、今も強く心に残っている人は、赤ちゃんをおんぶしていた人の事です。お母さんと思われませんが、顔は目も鼻も口もはっきり分からないくらい焼けただれ、テカテカ光っていました。赤ちゃんは背中でのけぞっていて、息をしているかどうか分かりません。いつまでもいつまでも、そんな行列は続きました。

翌日

家から南へ百メートルくらい行ったところに、私たち子供がよく遊んだ「千田（せんだ）公園」に「昨日歩いていた人たちが一杯いるよ」と聞いて、行ってみました。

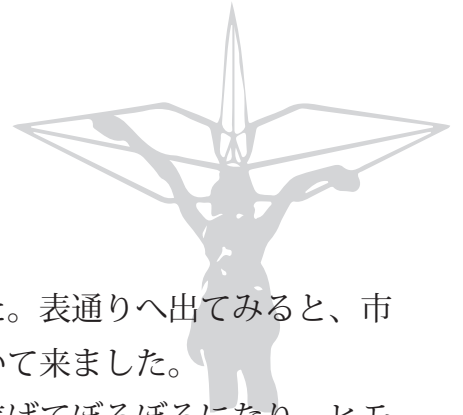
木陰に、石段に、石を敷き詰めた参道に、石塀の横に、大勢の人がぎっしり横たわったり、背を丸くして座っていたりしていました。

ほとんどの人は身動き一つせず、すでに亡くなられているようでした。

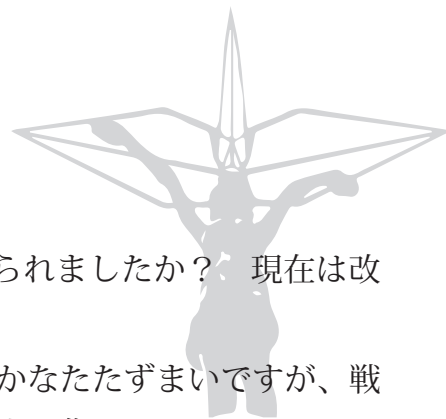
昨日赤ちゃんを背負っていた女の人を見つけました。お乳をあげようとして背中から下ろし、胸元へ抱きかかえていましたが、すでに母子とも息絶えていました。

お母さんの顔は真っ黒で、熟したアボガドの皮のようでした。

「水、水、水を下さい」とあんなに口々に言っていた人に、「水をあげると死ぬから駄目だ」と云われて、一滴の水も飲ませてあげられなかったことが悔やまれました。子供心に



も涙がポロポロ出て、泣きながら家に帰りました。



皆様は広島に来られて「平和公園」「資料館」などご覧になられましたか？ 現在は改修中で全容が見られなくなっています。

今は公園となり、いろんな「モニュメント」がつくられ、静かなたたずまいですが、戦前は広島一、二の繁華街でした。一部の人の疎開後も、大勢の人の住む町でした。

夫の実家は、現在の「東館」の少し北にありました。その年の春、名古屋から母の弟であるオジの家族六名が疎開してきて、一時同居していました。八月の中旬ころには、もっと閑静な田舎に引っ越すことになっていました。

当日八月六日 八時前に

夫は西方面の中学校代用教員として、本校へ行きました。

名古屋から来た女学校三年生の長女は国鉄（JR）へ動員中、中学一年生の長男は雑魚場町の建物疎開の後片付けに動員中で、三人は「行ってきます」と元気よく出かけました。家には夫の母、名古屋のオバ、八歳、四歳の女の子、三歳の男の子、五名がいました。そして、あの悪夢の「八時十五分」。ウラン型原子爆弾は三百メートル北の上空でさく裂しました。

夫は、学校の校舎の下敷きになり、ようやく這い出しました。

片方の目は見えず、足は打撲と裂傷で、歩くこともやっとでした。

火の手が中心部よりせまってくるので、西の方面の山手へのがれました。逃げる途中、「黒い雨」をかぶり、全身真っ黒い油のようなものでベタベタになったということです。

翌日、中島町の家へ、大方の橋は破壊されたので、大廻りしてやっと帰り着きました。そこには誰もおらず、焼け跡からは残り火の煙がまだ上がっていました。

一昼夜を飲まず食わずで、倒れそうになりながらそばの川（元安川（もとやすがわ））へ下りて、水を飲もうとしました。

川の中は、火の手から逃れ、川に飛び込んだ人たちの死体がびっしり浮いていて、かき分けてもかき分けてもかき分けても両手が入られません。やっと水を手にすくって飲みました。

人心地つき、川から上がり、座っていると、現在の「平和大橋」の方から中学生の「ケンちゃん」が帰ってきました。

無傷でした。

ケンチャンは、夫の変わり果てた姿にとまどっていましたが、「ケンチャン、無事だったか？」と声をかけると「お兄ちゃん？」と呼びかけ、二人は再会を喜び合いました。

その日の夕方、名古屋から、オジが来て、家の敷地の中の遺骨を探しましたが、高熱で焼かれた骨は、灰になっていました。灰を少し集めてケンチャンをつれて名古屋に帰りました。

長女はとうとう帰ってきませんでした。

名古屋に帰った健チャンは、翌日から高熱が出て歯ぐきからも出血、髪の毛もごっそり抜け落ち、苦しみ抜いて十日後に亡くなりました。

後日、オジに会ったとき、「広島に行かせなきゃなー」と、一人言のようにつぶやいていました。名古屋の自宅はまったく空襲の被害を受けていませんでした。

話は変わりますが、戦後の広島教会の事をお話させてください。

「一九八二年」、八月六日に近い八月第一聖日を「平和聖日礼拝」と制定されました。それ以前「広島教会」では、八月六日が近づくと、原爆で亡くなられた教会員三十名の方々の追悼をした後、牧師が説教されました。八月六日前の在籍数は約七十名でした。

戦後七、八年経ったころと思います。四竈先生がお説教のなかで、広島に原爆が落とされたのは「神の恵み」であったと語られました。

私は耳を疑いました。あんな残酷な人道上とても赦されない行為を、何故、そう云われたのか、理解できませんでした。

その後、八月六日が来る度に、その意味を考え続けました。

その牧師が、神様の許に行かれ、広島教会で葬儀が執り行われたとき、ご遺族の方と話している中で、先生のご長女が十六歳で被爆後亡くなられた事を知りました。

女学院在学中、動員中に被爆され、ひどい傷を負ってご家族の疎開先へやっと帰られ、ご家族の祈りの中で治療されていましたが、九月四日、神様の許へ召されました。

その時、彼女のご両親に「今まで有り難うございました」、「これからイエス様の許へ参ります」とお別れの言葉を言われたそうです。

また牧師夫人は「神様のなさることはすべて美しい」と、いつも云っておられたことを伺い、本当に深い、すごい信仰生活を送られたご夫妻、ご家族だったと思いました。

ご家族の男子三名のうち、お二人は牧師になられ、ご長男の方は、引退後、ずっと証言活動をされました。

「核兵器」は人間を非人間にします。

「核兵器」は、非人道的な無差別な大量「破壊兵器」です。

「核無き世界」への働きかけは、被爆直後に広島、長崎の原爆体験者の悲痛なまでの訴えから起こったものです。

広島教会出身の宗藤尚三牧師は、生涯をかけて長い間、証言活動を続けてこられました。二〇一六年十月に、二日後に「証言」の予定をもたれていましたが、急逝されました。そしてこの礼拝堂で、ご葬儀がとり行われました。

「一度はあやまち」「二度は神への裏切り」という言葉を残されました。

二〇一七年十月、「ノーベル平和賞」を受賞の「I C A N」は若い人の集まりと聞いていますので、未来を次の世代の方に託したいと思います。

これまで以上に、「核兵器廃絶」の訴えと「世界平和」を全世界の人々とともに輪を拡げて、必ず実現して欲しいと思います。

ご静聴有り難うございました。